朝日新聞　第3種郵便物認可

美術時評

観者を魅する力

具象絵画のむずかしさ

河北倫明

野崎貢「白夜」（新制作展から）

「新制作協会」と、「一陽会」と、「二水会」と、まず「写実の本道を行く」とかって呼称した一水会をみると、たいていは抽象画めいたものは一点もなく、人物や風景や静物などの画題が淡々と平明に展開されている。木下孝則の美しいバレエ・ダンサーの絵があるかと思うと、高野三三男のみがきこんだシャクヤクの花の絵があり、その間に田崎広助の阿蘇山や、中村善策の石狩風景などが各地の風物景観をつたえている。いずれもわれわれに親しい題材ばかりで、見る方としては気安く、さらさらと絵の中にとびこんでいけるわけだ。

ところで具象絵画のむずかしさは、そこからである。気安くとびこんでは行ったものの、その中にこれという楽しみがなければ、退屈してもどるより仕方がない。若い友人の一人が「二水会は雑誌の表紙と口絵のようなもんです」といったが、これはいいやすくして、また出やすいことの表現だろう。つまり観者を絵画中に引きとめるだけの魅力、刺激、内容が乏しいわけである。わかりきった陳腐な話が用意されてあるだけでは、現代絵画としては落第だ。見物はどん欲だから、いいやすくして、しかも引きこまれない新しい楽しみのあるものを求めるのが当然である。

写実絵画、具象絵画がこの要望に答えるには、作者自身が写実や具象の中に、よほど清新な宝物や話題を発見し、確認し、はあく（把握）しているのでなければなるまい。もう月並みな程度ではだれも魅力を感じなくなっているのが現状である。しかし、この宝なり話の種なりは、もし自然や外界が無限なら、かならずやその中に、何かの形で隠されているだろう。今日の具象派の作家にのぞむことは、ただいいやすく親しみやすい画境にしがみつくことではない。小さな個人の感覚や細工をこえた自然と環境の中から、これぞというものを新発掘し、新開拓し、画面化することである。小野末でも、広瀬坦、近岡善次郎らでも、すすんでこの難路をたどってもらいたいものだ。

一水会を出て、一陽会や新制作にはいると、多少ようすが変わってくる。そのことは抽象的な表現がふえてくることですぐ分かるが、さらにいえば、写実絵画の平淡なはいりやすさをそのまま使わないで、それぞれ何か今風の角度をつけようと工作している点が特徴だ。少し皮肉にいえば、別に新しく珍奇な宝や話題がふえているわけではないのだが、絵画への導き方、引きとめ方、刺激の仕方に、今風のアクセントがついているのである。

たとえば、一陽会では、鈴木信太郎や野間仁根といった指導的作家にはいまる一種童画的なのどかさ、稚拙で素朴な味わいによる自由さといったものが強調されて出てきている。そのため、この会場は、どもするとはねまわり、踊りまわるようなザワめいたものになる。一水会にない親しさ、のどかさはあっても、落ちついた引きとめは出来ない状態だ。

これに対すると、新制作の会場には、今日流行のデザイン的な均衡感覚や色彩かい（調）調がながれていて、この会特有の都会的な風味を発散している。これがもし何か実用の上にのったデザインであったら、快適であり、効果的であるにちがいない。その点、建築や家具についてみれば、話のつぐつまは十分にあうのである。ところが、それ自体で独立する絵画や彫刻のようなものになると、デザイン感覚だけでは重量がたりず、厚味や深味や力づよさの点で心ぼそくなってくる。デザイン感覚だけで多様複雑な人生の現実をわりきってしまうことができず、そのわりきれぬところに対処できるものでなければ、独立した作品とはなり得ないからである。

猪熊弦太郎の「歴史」、田中田鐵子の「作品」、脇田和の二点などのほか、何点かの目ぼしいものがあったが、いずれもこうした生な現実感をどのようにこなすかが切実な課題だ。これと同じ事情は、伝統的な装飾性を現代式にアレンジしたがる道を求めている日本画部にもみられるが、なかで山本兵人「夕焼け山水」のような充実したりっぱな作品があることは認っていいだろう。中堅どころでは、野崎貢の「白夜」が引きしまった強さをみせ、加山又造の「火の鳥」も成果のほどはともかく、熱心な意図を感じさせる大作であった。

（美術評論家）

―いずれも10月10日まで、東京上野、都美術館で。